



# 布施だより

## 《 平和を語る時 ～ 長野上水内教育課程研究協議会から ～ 》

10月21日(火)に長野上水内中学校教育課程研究協議会が教職員の研修の機会として、長野・上水内の各中学校を会場に開催されました。

本校では「総合的な学習の時間」の研究会場として公開授業が開催されました。他校の先生方が36名参観する中、3年5組の生徒諸君が授業に臨んでくれました。授業の題材は「平和を願う人々の願い」、主眼は「戦争と平和について考えてきた生徒が、戦争に関する新聞記事の内容をグループの友に伝えたり、平和を願う人々の思いを知ったりすることを通して、平和のために自分が大切にすることを考えることができる。」でした。



生徒達は「松代大本営 外国人記者はどう見た」「残された記憶」「調査続ける長野俊英郷土研究班」「山本住職の半生～肉親捜しに道開く～」の4本の記事から、1本を選び、<記事に載っている人の伝えたい思い>と<思いを知っての感想>を伝え合い、共有し合います。各々4人のグループ学習は、各自が選んだ記事から<思い>を掬い上げ、そこから自分の考えを持とうとします。生徒達は丁寧に記事からの文章を引用してきます。引用することで<思い>を自分の言葉に置き換えようとしています。

ここからが追究の醍醐味、<思い>をグループ内でつぶやき合うのです。ここで重要だったのは、何よりも学び合う信頼関係がしっかりと築かれていたことでした。だから安心してつぶやき合えるのでした。そしてつぶやきながら<平和への思い>に触れようと願う追究姿勢が伝わってきました。授業を通して感じられたのは、青年らしい未来志向で国際人として生きていこうとする、柔軟な決意にあふれた<思い>でした。

ここからが追究の醍醐味、<思い>をグループ内でつぶやき合うのです。ここで重要だったのは、何よりも学び合う信頼関係がしっかりと築かれていたことでした。だから安心してつぶやき合えるのでした。そしてつぶやきながら<平和への思い>に触れようと願う追究姿勢が伝わってきました。授業を通して感じられたのは、青年らしい未来志向で国際人として生きていこうとする、柔軟な決意にあふれた<思い>でした。

## 《 人権教育月間に寄せて ～ 校長講話<偏見と差別>～ 》

後期の人権教育の追究が始まっています。10日(月)には人権感覚を見つめ直す「偏見と差別」と題した校長講話がありました。以下、お伝えします。



皆さんは、大熊町を知っていますか？地図で見ると、この赤い矢印の先です。大熊町は、原発事故の起きた福島第一原子力発電所のある町です。大熊町は、原発事故のため、いまだに町民約11,000人全員が、町外での避難生活を強いられています。町民のほとんどの皆さんが住んでいた地域は、今でも「帰還困難区域」にされており、町には当分戻ることができない状態が続いています。大熊町の様子を見てください。上が震災前、下が震災後の写真です。大熊町の方々は、福島県内や、全国各地に避難しており、皆さんに配った作文を書いた中学生は、最初、福島県内に避難し、その後、新潟県の柏崎市に避難した生徒です。震災後も、卒業式の立て看板がそのまま残されていました。大熊中学校の卒業式は、ちょうどあの震災が起きた3月11日の午前中に

震災前



震災後



卒業式は、ちょうどあの震災が起きた3月11日の午前中に

われました。原発事故が起こり、立ち入り禁止となり、看板は誰に片付けられることなく、あの時から時間が止まってしまったかのように、そのまま残されています。この作文を書いた生徒は、卒業生を見送った在校生の一人です。

～「聞いてください、私の思い」 新潟県柏崎市立松浜中学校3年 ～

大熊町。緑の木々と青い海に囲まれた自然豊かな私のふる里です。そして、あの原発事故が起きた町。私のふる里は一瞬にして「死の町」とまで言われる誰もが嫌い、イヤがる町になりました。それまで私にとっての「人権」とは人間が生まれながらもっている権利と学校の授業で習った程度で、特に気にもせず考えもしないただ聞いたことのある言葉でしかありませんでした。

しかし、避難してからは、同じ福島県内でありながら、耳に入ってくる話は「福島ナンバーの車がいたずらされた」「転校していった子が放射能のことでいじめられた」などの悲しい話ばかり。私はこの話を聞くたびに、「またかぁ…」と自分のふる里がだんだんと嫌がられていく事をととても悲しく思っていました。

( 中略 )

自分の体験を通して感じたことは、一つの問題に対して人の言葉をすべてうのみにするのではなく、真実とはなんなのかを見つけだすことが人権を守ることにつながるのだと思います。私たちが差別をなくすためにできること、それは、「その人、その出来事についてしっかり知ること」「知ろうと努力すること」「正しい知識を深めるために学習すること」ではないかと思います。我も人も自分らしく生きる。これが「人権」を尊重することだと思います。「人権」について考えること。それはとても難しいことのように思えますが、意外と簡単なことではないでしょうか。同じ人間同士が平等に並んで歩くための権利。だれもが生まれながらにもっている大切なもの。自分も相手も同じひとりの人間として心に寄り添い、真実を見極め、理解し合う努力こそ、差別をなくし人権を守る大きな力になると思います。そして、私自身も差別や偏見、いじめがなくなるように強い心をもって、まずは自分から立ち向かっていきたいです。 【第33回全国中学生人権作文コンテストより】

今の自分をしっかりと見つめ、これから自分は何をすべきか、今自分は何をすべきか、それをしっかりと考えてみてください。

～ ～ ～ ～ ～

誰もが心の内に内包している「偏見・差別」の感情と、どのように折り合いをつけて人と人とがより良い関わりを持とうとしているのか、生徒たちはもちろん私たち大人も自身に問い続けながらの毎日です。

## 《 飛翔する時 ～ 新人戦の活躍から ～ 》

11/1(土)新人体育大会バレーボールの部で、西中会場で男子バレーボール部の活躍に接していました。

前日遅くまで会場準備をしてくれていた10人の選手諸君はいつも以上に緊張の面持ちでアップをしています。第1試合が始まります。なかなかボールが手に収まらず、サーブをオーバーし、レシーブをぼとんと落とし、スパイクをネットに引っかけます。選手諸君の声もなかなか出てきません。

当然のように監督・コーチは檄を飛ばします。「人のせいにするな!」「人に任せるな!」「話せ!伝えろ!」。

そして時に突き放します。選手諸君は必死に考え、動き回ろうとします。フロアーに這いつくばってボールを拾い上げ、セッターにつなげます。アタッカーは精一杯の工夫を込めて打ち込みます。声を掛け合い、伝えるべき内容を、短い合間に交換し合います。

そうやって見ていると、プレーヤー諸君の動きが監督やコーチからの叱咤激励を恐れるのではなく、次第に自分の弱さから抜け出そうとする踏ん張りに思えてきます。わずか40cmのジャンプは仲間と気持ちを分かち合いたいという跳躍であり、自身の甘えに打ち克とうとする飛翔であり、信念をつなげたいというトスアップであったかのようなようです。そして今の自分の殻を打ち破ろうとするものがきでもあったようです。



1日めの試合を終えた解放感と、僅差で敗れてしまった悔しさをしまい込んで、10名の選手諸君は翌日の会場準備に淡々と向き合っていました。……初冬の収穫の一日でした。